

阪神間の住宅地形成に関する基礎的研究(2)

坂本 勝比古

—近代日本の大都市郊外住宅地形成過程—

研究の目的

阪神間の郊外住宅地形成は、明治35年前後から始まると見られるが、それから数えれば90余年が経過し、また最盛期となった大正、昭和初期から考えても70～80年の年月を経て、かつての大都市郊外住宅地は著しい変貌を余儀なくされている。阪神間の戦前の住宅地は、戦災によって大きな被害を受けるが、戦後の住宅難や人口の都市集中が続き、土地価格の高騰、大規模な公的集合住宅の建設、モータリゼーションの大波によって、既成の郊外住宅地は大きくその性格を変えつつある。

しかしその中でも、今なお住宅地開設当初の計画や理想を保ち続けているところがある。

前回の研究(1)では阪神間の郊外住宅地の形成過程を概観したが、今回はその中から開発当初の意図をなおよくとどめている幾つかの代表的な住宅地を選び、これらに関する埋もれた資料（パンフレット・文書・記録・個人所蔵写真ならびに証言等）を発掘すると共に、宅地の形成過程とそこに建てられた住宅について考察する。

第1章 阪神間宅地分譲の動向と形態

郊外住宅地の形成に当たっては各種の手法が考えられる。企業による大規模かつ組織的な宅地の形成から、個人的な地主と購入者との売買による小規模な宅地の形成までその形態はさまざまである。その形態を分類してみると次のようになる。

- イ. 私鉄の住宅地分譲方式
- ロ. 民間土地会社による住宅地分譲方式
- ハ. 民間会社による住宅地分譲方式
- ニ. 区画整理組合による住宅地分譲方式
- ホ. 個人による宅地売買方式
- ヘ. 公的機関（地方自治体など）による住宅地分譲方式
- ト. その他上記各方式の中の賃貸方式

このうち（イ）については都市郊外に住宅地を形成し、宅地を供給する最も有効な手段をもつ私鉄によって積極的に営まれたもので、これについては前回の研究(1)の中に触れている。昭和13年2月刊の「日本地理風俗大系、近畿地方」によると、大阪市を取り囲む各方面の住宅地

を取り上げているなかで、阪神間については阪神海岸、武庫川方面、六甲山、六甲山麓^{さんろうく}地方と地域を分けて紹介している²¹⁾。

このうち阪神地方とした一覧表によると阪神電鉄関係で次のものがある。

① 出来島住宅地	40,000坪
② 尼崎分譲地	10,000坪
③ 難波住宅地	25,000坪
④ 大洲住宅地	28,000坪
⑤ 西高州住宅地	43,000坪
⑥ 浜甲子園住宅地	10,000坪

阪急電鉄関係では六甲山麓地方として次のものがある。

⑦ 西宮北口住宅地	30,000坪
⑧ 甲東園経営地	22,000坪
⑨ 仁川高台住宅地	10,000坪

他に阪急電鉄神戸線では次のものがあった。

⑩ ※岡本住宅地	17,557坪
⑪ ※塚口住宅地	24,000坪
⑫ ※園田住宅地	70,892坪
⑬ ※武庫之荘住宅地	60,383坪
⑭ ※稲野住宅地	22,000坪 伊丹線
⑮ ※新伊丹住宅地	100,000坪 〃

※印は「京阪神急行電鉄五十年史 昭和34年刊」による。

私鉄の沿線住宅地開発で見べき地域は、阪神電鉄では上記のほか上甲子園の甲子園ホテルを含む一帯であり、阪急電鉄では新伊丹（昭和10年）、武庫之荘（昭和12年）に注目したい。

私鉄に限らないが、良好な住宅地計画を進めるに当たって、優れたプランナーや建築家の参加が望ましいことは論をまたないが、その良い事例が阪急電鉄の地所課に昭和8年ころ入社した貴宝院隆（京大、昭和8年卒）²²⁾、中川武二（神戸高工、昭和6年卒）である。2人の存在がこの二つの住宅地計画を成功させたものと推察できる。また、昭和初期に関西土地(株)に在職して、大美野田園都市の計画に携わった下村喜三郎（東京美校、大正11年卒）は、昭和9年阪急電鉄地所課に入社したことが報告されている²³⁾。

今回は阪神電鉄が開発経営した南甲子園住宅地につい

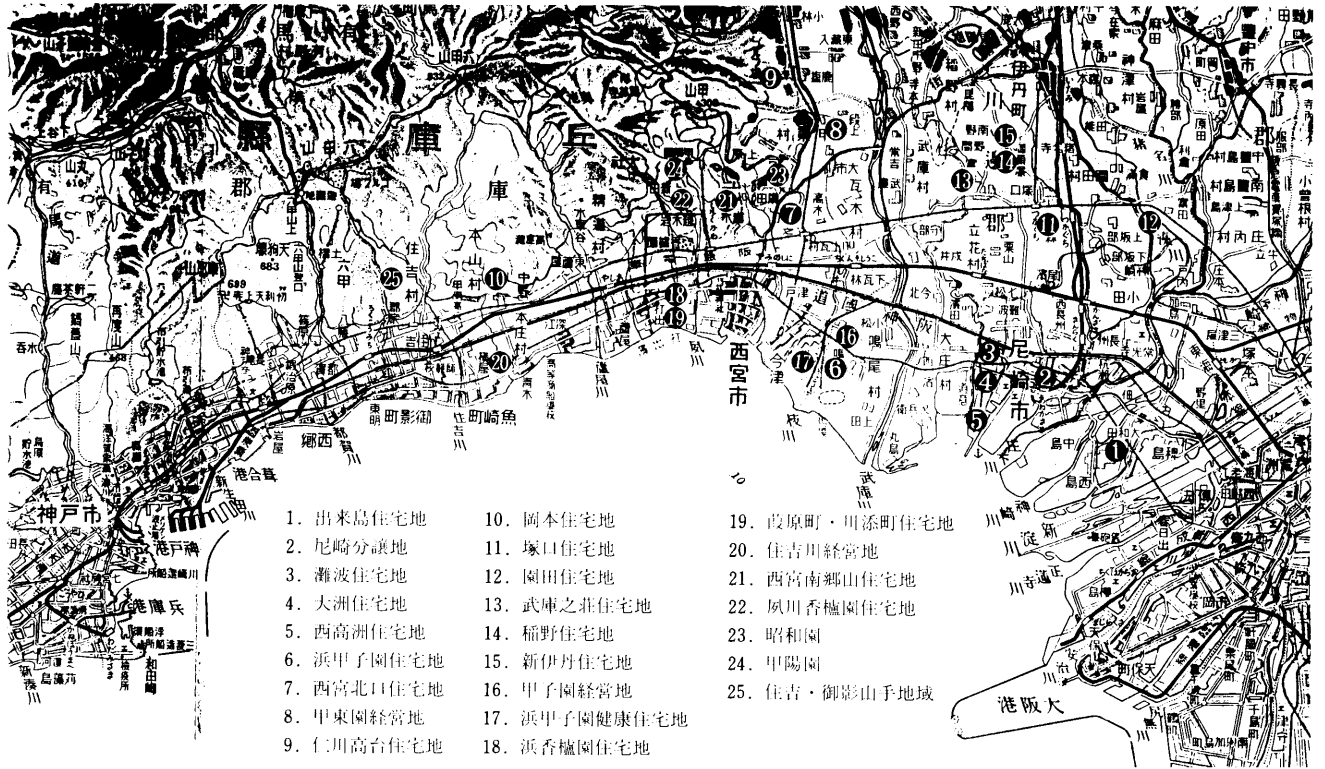


図1-1 阪神間住宅地分布図（本文関係のみ）

てその概要を述べるが、この住宅地については土地並びに建物の分譲を行っていながら、関与した建築家については不詳である。

前述の私鉄の住宅地経営が本業の電車の運行に比べてサブ的意味をもつものに対して、(ロ)(ハ)については民間の土地会社の住宅地経営であり、良好な宅地の供給が主目的であったため、住宅地の計画や造成に当たって積極的に取り組む姿勢を示していた。関西では先に触れた大美野田園都市住宅地や千里山の例があるが、阪神間では次のような事例があった。

- | | | |
|--------------|-------------|----------|
| ⑩ 甲子園経営地 | 日本住宅 | 7,000坪 |
| ⑪ 浜甲子園健康住宅地 | 大林組 | 60,000坪 |
| ⑫ 浜香櫨園住宅地 | 夙川土地 | 37,000坪 |
| ⑬ 葭原町・川添町住宅地 | 夙川土地 | 40,000坪 |
| ⑭ 住吉川経営地 | 大林組 | 5,000坪 |
| ⑮ 西宮南郷山住宅地 | 住友信託 | 4,000坪 |
| ⑯ 夙川香櫨園住宅地 | 大神中央土地 | 150,000坪 |
| ⑰ 昭和園 | 日本ペイント、日本住宅 | 30,000坪 |
| ⑱ 甲陽園 | 甲陽土地 | 100,000坪 |

以上の土地については、(イ)の「日本地理風俗大系近畿篇」から引用した。但し、面積については時期によって変動する。(イ)～(ハ)のうち比較的良好な住宅地環境をもっている「浜甲子園健康住宅地」「阪神電鉄経営南甲子園住宅地」「夙川香櫨園住宅地」「西宮南郷山住宅地」についてはその概要を述べる。

(二)については、明治末から大正、昭和前期にかけ

て各地で行われたことは前回の研究(1)の中で西宮市、芦屋市について触れたところである。

(ホ)については、昔から一般的に行われていた方法である。今回は優れた住環境を生む上で、個人的な売買で宅地を取得していった、住吉・御影地域⑮の主として山手地区の住宅地について考察する。

第2章 主要住宅地の形成

2-1 浜甲子園健康住宅地

この住宅地は甲子園野球場の南端で、その名の通り大阪湾に臨む海岸沿いの住宅地である。この住宅地については前回の研究(1)でも若干触れたが、大手建設会社の大林組が阪神電鉄の委託を受けて開発・経営を行ったもので、阪神間の住宅地経営のなかで、幾つかの新しい試みがなされた。大林組ではこの地の開発に当たって一般市民の関心を高める意味もあって大阪毎日新聞社と提携し日本建築協会の協力を得て「浜甲子園夏の家」のコンペを実施した。その優秀作と大林組の試作住宅を加え「浜甲子園健康住宅展覧会」を開催している。このような宣伝はかなり成功して、そのモデル住宅はたちまち売り切れ、その後も申込みが相次いだと言われる(図2-1)。

この住宅地は約6万坪(20万㎡)50ブロック416戸分の宅地が計画的な街路割りの中で分譲された。大林組は積極的にこの経営に取り組むが、それを可能としたのは住宅部の存在であった。大林組住宅部の設立は大正14年4月で、当時の副社長大林賢四郎が「日本の建築界で住宅

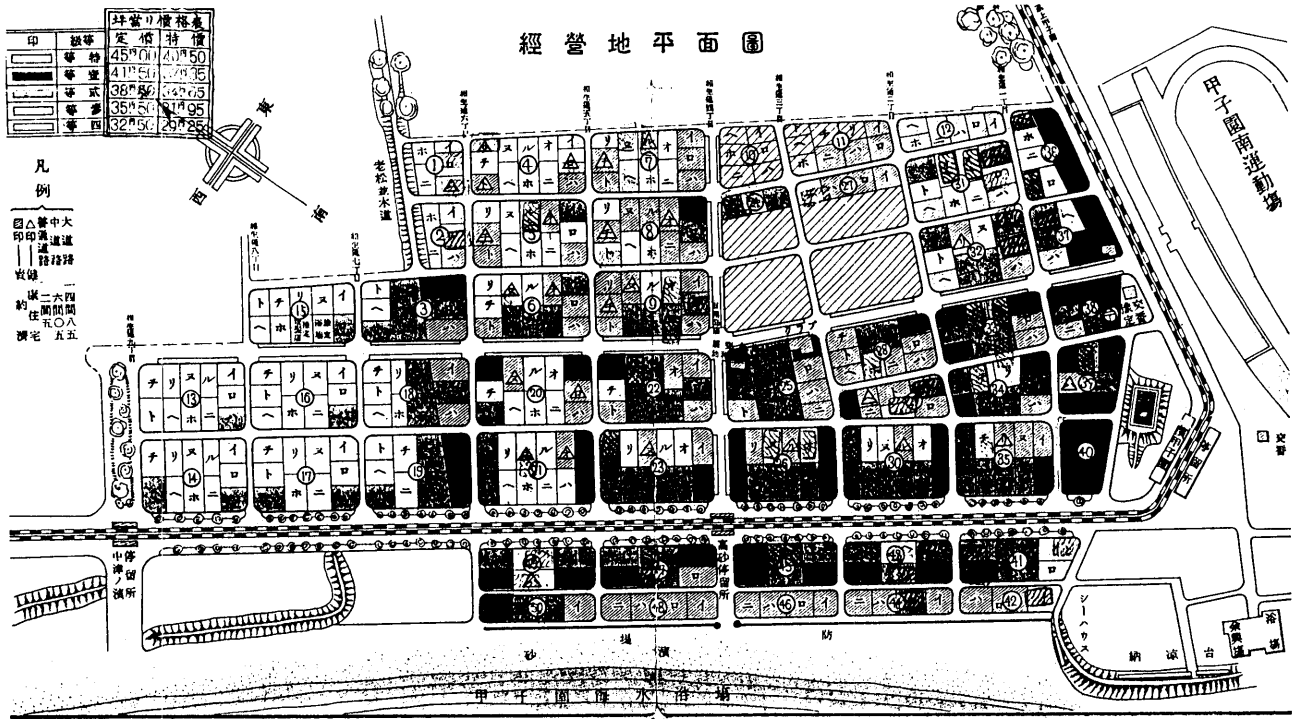


図2-1 濱甲子園健康住宅地計画図 (昭和6~11年)

建築に費やされる工費は住宅以外の建築工事費を凌駕する。」したがって建築業者として「何よりも住宅建築に注目すべし」として住宅部を設立し⁸⁴⁾、武田五一の弟子であった松本儀八を部長として設計技術者のほか、腕の良い大工職を本社の直属として住宅建設に力を入れた。しかし本来大林組住宅部は後にも触れるように、このような中流あるいは小住宅を数多く手掛けることより、大邸宅、豪邸と言われる住宅を設計することの方が多かったと思われる。

大正後半から昭和前期における日本のスパニッシュスタイルの流行に当たって、大林組住宅部の果たした役割は小さくない。この住宅地の整備に当たって、クラブハウス、幼稚園、日用品店、食料品店、医院、浴場、理髪店、喫茶店、交番のほか上下水道、道路舗装、緑地帯の造成などが計画された。

宅地の構成を見ると、各ブロックは東西に長い矩形で隅切りとし、ブロック内の宅地は単純に南北に仕切るのではなく、ブロックの東西側は宅地を三つに区切り中央部のみを南北に区切り、一つのブロックを10宅地に分ける。各宅地の広さは場所によって異なるが、例えばNo.22ブロックを見ると平均坪数は110坪~115坪であるから、100坪が平均的なこの程度の住宅経営地の中ではやや広い方に属している。また坪当たりの価格を見ると特等45円、1等41円50銭、2等38円50銭、3等35円50銭、4等32円50銭とランク付けがあり、これを特価として更に10%の値引き価格で売り出していた。これによって昭和

5・6年ころのこの地域の価格水準を知ることができる。

また、この宅地の購入者には、大林組住宅部が住宅の設計は無料とし、大阪又は神戸と濱甲子園間の定期代1か年分を贈呈するという奉仕的な試みもを行っていた⁸⁵⁾。

2-2 阪神電鉄経営南甲子園住宅地

この住宅地は甲子園野球場の南西にあり、阪神電鉄の甲子園住宅地経営の一環として、昭和初期から進められた、上甲子園、中甲子園、浜甲子園に加え、この南甲子園地区が戦前の最終段階として計画され、昭和12年ころにはほぼ整備されるに至る。この住宅地は前述の大林組が開発した濱甲子園健康住宅地に連担している。この住宅地の分譲に当たって、当時作成された販売パンフレットによると分譲地のうち13か所について土地付きの建売りを行っている。

これらは敷地面積が75.5坪から112坪まで80坪台が最も多く、建物の建坪数は38.22坪から44.40坪まで、最も多いのは43坪前後であり、価格帯は土地のみ坪35円から建物ともは全体で12,350~15,410円までで最も多いのは13,000円台であった。現在でも残存する住宅があり、当時の様子をうかがうことができる。

注記) この地域の住宅は、今回の地震で被災を受けたが、その程度は比較的軽微で、戦前期の住宅で残存しているものが少ない(1995.3.31.記)。

2-3 夙川香櫨園住宅地

表記の住宅地は前回の研究(1)の中で若干触れたが、更

敷^ふ行^{えん}すると、阪神間の民間土地会社が経営した住宅地の中でも最も魅力的な環境をもつ住宅地となっている。

この住宅地を経営した大神中央土地(株)は大正7年3月に設立され(社長・加納由兵衛)、専務の宮崎弥作は大阪出身で、日本煉瓦^{れんが}社長であった宮崎弥三郎^{ほろちろう}の弟、日本^{ほんごう}鉄器輸出組合理事長など諸会社の重役を兼ね、この事業を積極的に進めたひとりであった。この住宅地は地形が起伏に富み、道路が回遊状に設けられており、1区画当たりの坪数が大きく各住宅は敷地の条件に合わせて多様な構成を見せる。また緑の豊かな点でも良好なイメージを与える。更にこの住宅地のもう一つの特徴は、外国人向け住宅が多数建てられていたことである(図2-2)。

大神中央土地(株)の第19回営業報告書によると昭和2年の事業概要に

「外人住宅、賃貸契約又ハ土地ノ分譲方ニ関シ商談ノ成立シタルモノノ内ニハナショナルシティ銀行、日本ウエスチングハウス電気株式会社等アリ、之ニ既設ノインターナショナルゼネラル電気株式会社、日本ゼネラルモーターズ株式会社ノ幹部住宅ヲ加フルトキハ殆ンド米国最大級ノ会社ヲ網羅シ、全部完成ノ上ハ異彩アル住宅地トシ益々真価を認メラルト俱ニ、附近一帯ノ開発上裨益^{ひえき}スル所大ナルベキヲ

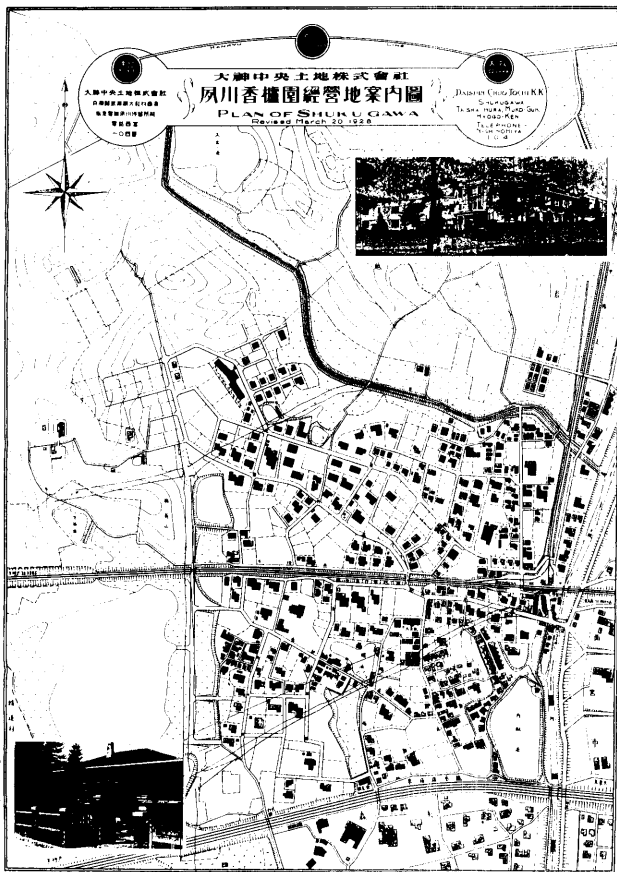


図2-2 夙川香櫨園住宅地案内図 (昭和6年5月)

信ズ」とある。

このうち旧ナショナルシティ銀行についてはW.M.ヴォーリスによる一連の住宅作品として、スパニッシュスタイルの外観を見せている(写真2-1)。更にパインクレストアパートメントもホテルとアパートとを兼ねた施設で外国人にも好まれ、住宅地の中心に建てられた。この建物は現存しないが、パインクレストアパートメントの前に並んで建てられたジェネラルモーターズの社宅は今でも数棟が残存している。

日本人建築家の住宅作品も少なくない。モダニズムの代表的な安井武雄の自邸(昭和6年)、三越住宅部の作品として岡田孝夫の斧原邸、洗練されたモダンの典型として池田総一郎の前田邸(昭和8年、現存せず)(写真2-2)、石川純一郎の黒正邸(昭和10年)、池村元之助(東京高工卒)の武居邸(昭和6年)、笹川慎一の宮崎弥七郎邸(大正15年)(写真2-3)などがある。更に建設会社の設計部の作品として、大林組住宅部の泉勤一郎(昭和9年)(写真2-4)はスパニッシュの秀作であり、和洋折衷の井上邸(昭和9年)は清水組の設計施工であった。

このほか阿部邸がヴォーリスの設計で昭和4年に出来ている。



写真2-1 旧ナショナルシティ銀行社宅(昭和4年)ヴォーリス設計(今回の震災で倒壊1995.3.31.追記)



写真2-2 旧前田邸(昭和8年)池田総一郎設計(現存せず)

2-4 西宮南郷山住宅地

阪急電鉄神戸本線夙川駅の北東に位置する南郷町、名次町は「南郷山」と呼ばれ、阪神間でも高級住宅地の一つとして知られている。この住宅地がどのような経緯と建築があって良好な住宅地として発展したかについて考察する(図2-3)。

この住宅地は西宮市の西部を流れる夙川の東、南北に長い尾根状の地形の上に乗るかたちで形成されている。離れてこの地を見ると緑に覆われた丘陵地に大きな屋根をもつ邸宅が木立のなかに見え隠れする。

南郷山を開発分譲したのは住友信託銀行(株)であった。入手した南郷町に分譲案内によると、区画数は63区画、平均坪数は100坪台30区画、200坪台17区画、300坪台2区画、400~500坪台6区画、600坪1区画、60~100坪台4区画、保留3区画となっている。道路は尾根に沿ってなだらかな曲線を描き、北へ行く程稜線は高くなっていく。宅地は、この尾根の道路に沿って東西に配置され、周辺の住宅地より一段高い丘陵であるため、各宅地からの見晴らしは良好である。

この住宅地は昭和6年4月ころから売りに出され、約1万3000坪が分譲された。分譲価格は坪当たり45円、50円、55円、58円、60円台となっており昭和8年に完成した。値段は当時として他と比較するとやや高めに設定された。上下水道、排水、ガスが整い、児童公園も設けられた。

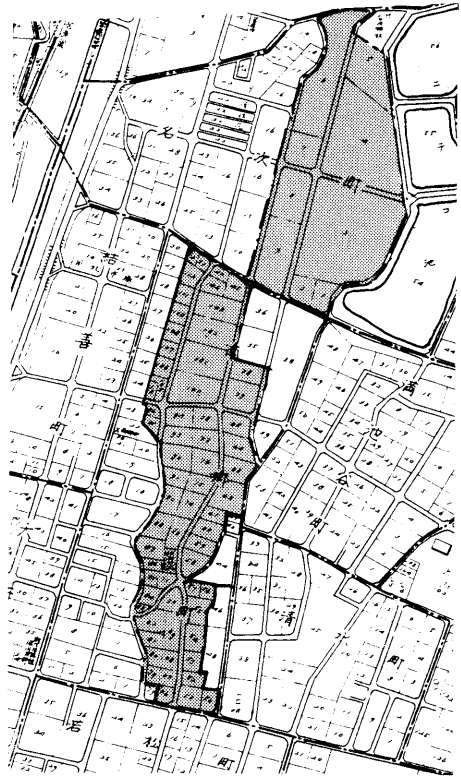


図2-3 西宮 南郷山・名次町住宅地 (昭和6年~)

注記) この地域の住宅は、今回の地震でかなりの被害を受け、戦前期の住宅が、数多く滅失することとなった(1995.3.31.記)。

更にこの住宅地の北側の尾根伝いに名次町に分譲地が造成された。これは大阪の杉村倉庫(株)が開発した住宅地で、近くのニテコ池と新池に挟まれた土地で、南北の中央道路の東側の区画が大きく、240坪台から500坪まで7区画、西側は100~188坪まで14区画の分譲がなされた。

この分譲地で注目される点は、購入者に社会的地位の高い人が多いことで、特に住友系企業の重役クラスの名前が見られる。例えば古田俊之助(住友総理事)、岡橋林(住友銀行頭取)(写真2-5)、今村幸男(住友信託専務)らが住まい、また中根貞彦(三和銀行頭取)、岩井豊治(岩井商店主)らの名前が見える。更に松下幸之助もこの地に住まいを構えた。



写真2-3 旧宮崎弥七郎邸(大正15年) 笹川慎一設計



写真2-4 泉勤一郎邸(昭和9年) 大林組住宅部設計



写真2-5 旧岡橋林邸(昭和6年) 竹腰健造設計

このうち古田俊之助郎、岡橋林郎、今村幸男郎はいずれも住友営繕の建築家竹腰健造の設計になる。竹腰健造は明治45年東京大学建築学科を卒業してイギリスに留学し、R.I.B.A.の試験に合格して帰国し、住友に入った。建築家長谷部鋭吉と並んで住友営繕の指導的地位にいた人物であった。彼の作品は洋風を加味しながら日本調を生かす、いわゆる新日本調とも言える傾向のものであり、堅実な作風を示している²⁶。

このほか中根貞彦郎は数寄屋風の格調高い住宅で、大林組住宅部の設計になる。大林組住宅部は洋風としてスパニッシュを得意としたが、和風では洗練された数寄屋の伝統を採り入れたものが多い。この建物は現存しないが、その代表例であった(図2-4、写真2-6)。

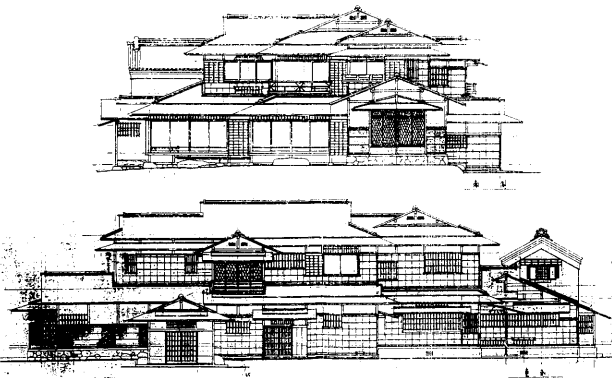


図2-4 中根貞彦郎



写真2-6 中根貞彦郎(昭和11年)大林組住宅部設計

第3章 住宅平面の傾向

3-1 概観

阪神間住宅地に建設された住宅は今日もなお残存しているものが少なからずあるが、その間取りは建設された時代の動向を反映していて興味深い。

開発地の多くは宅地分譲であり、住宅は買い手が個々に建設するのが一般であるが、一部はその住宅地の雰囲気誘導するために、開発主体側で要所々々に数戸をあらかじめ建てて建売分譲する例がある。これらは、主に中流サラリーマンを対象としたものであるが、その分譲

パンフレットなどを基に当時の間取りの傾向を考察しよう。

間取りは、開発主体によってそれぞれ違いがあるが、概して明治期以来の和風中流住宅を基本としつつも、大正期から発生した中廊下型も多く、また当時のモダンな洋風を加味したデザインのものもあり、さまざまな傾向を反映している。

3-2 浜甲子園健康住宅地

浜甲子園住宅地は昭和5~6年ころに阪神電鉄の開拓したリゾート住宅地で「夏の家」と銘打ち、その住宅は大林組住宅部が担当している。約400戸の宅地のうち13戸を建売りにしているが、うち5戸は日本建築協会主催の懸賞当選案を用いている。

平面の傾向は和室の連続した開放的なものが多いが、整った正式の続き間(床の間付き座敷と次の間)は1戸のみで、他はいずれも食い違い続き間など、くだけた感じのものが多い。

洋風居間を中心とするものも約半数の6戸を数え、中廊下型的なプランは2戸のみである。総じてリゾート住宅ということもあってか、当時としては新しい傾向を反映し、外観も洋風を採り入れた斬新なものも多く、中には木造フラットルーフが2戸を数える。

これとは別に大林組住宅部の試作住宅があり、このプランもほぼ同傾向で、その1号型(図3-1)は木造平屋建、洋風の居間・食堂を中心とし、南に広縁を設け、

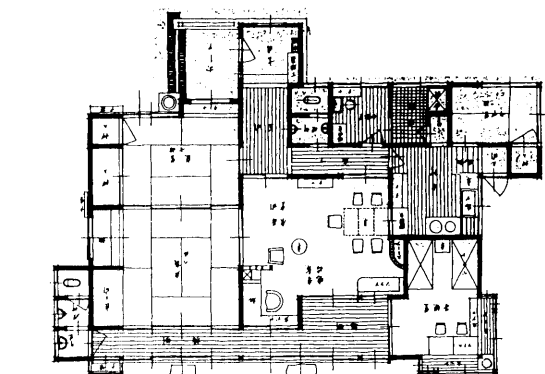
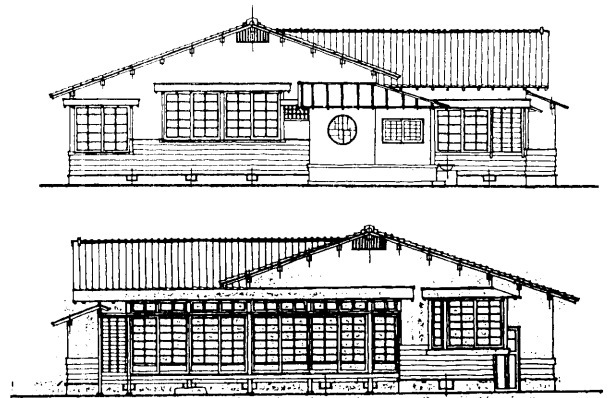


図3-1 阪神浜甲子園住宅地大林組健康住宅1号型(昭和6年)

東側に子供室と台所、西側に座敷（8畳）と寝室（6畳）を配する。玄関は北側で小さな中廊下により便所・浴室を隔てている。敷地は113.75坪，建坪は36.77坪である。

3-3 南甲子園住宅地

南甲子園は昭和10年前後の同じく阪神電鉄の経営であるが、約200区画中に11戸を建売りにしている。こちらは普通郊外住宅地としての性格の故か、あるいは時代の数年の後れを反映してか、全般的に極めて堅実なプランが多く、徹底して全戸中廊下型のプランをとっている。

一方、外観はスパニッシュ瓦と白壁の洋風に統一されているが、各戸に変化をもたせ、玄関ポーチや応接間のアーチ状洋風窓、パーゴラ付きテラスなどが意匠を特徴付けている。間取りはおおむね南側に8畳・6畳の食い違い続き間をとり、縁側あるいは広縁を設け、その端部に6畳大程度の洋間を置く。中廊下の北側には茶の間となる4畳半と女中室又は納戸として使われる3畳を配しているが、茶の間が南側に出ているプランも3例ほど見られる。2階には、床の間、縁側付きの8畳と4畳半の2室をもつが、続き間を構成せず2室が分離している例が多い。この時代に中廊下型の典型とも言うべきプランが安定して建てられていたことを示している（図3-2）。

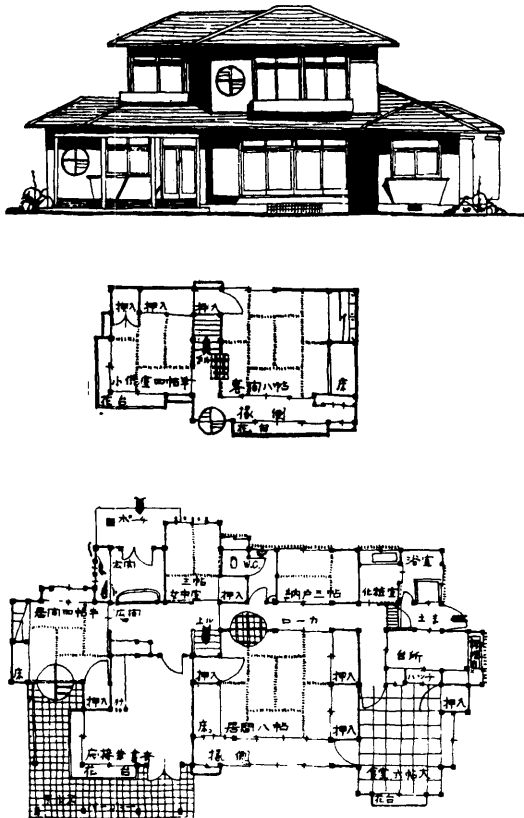


図3-2 阪神南甲子園住宅地分譲住宅の1例（昭和10年ころ）

3-4 新伊丹住宅地

前回の研究(1)に紹介した新伊丹住宅地は昭和10年建設の個性的住宅地である。阪急電鉄の経営で、この場合も約150区画の宅地の売出しの中に専用住宅10戸，店舗付き住宅1戸を建売分譲している。ここでは個々に「和風」「洋風」とはっきり銘打ってデザインされており、その数は半々である。但しプランはいずれも同傾向で、専用住宅全10例とも中廊下型をとっている。玄関脇に洋風応接間を有するものが7戸に上る。また中心となる居間を洋室にしたプランが3例あるが、その2例は外観を「和風」としており、内部プランと外観とは切り離して扱われている。いずれも落ちついた品格ある姿を呈している。食事室については北向き3例，南向き7例，その各々半数以上は洋室で、当時の日常生活重視の間取りの考え方が普及し、かつ洋風もかなり積極的に採り入れられていることを示している（図3-3）。

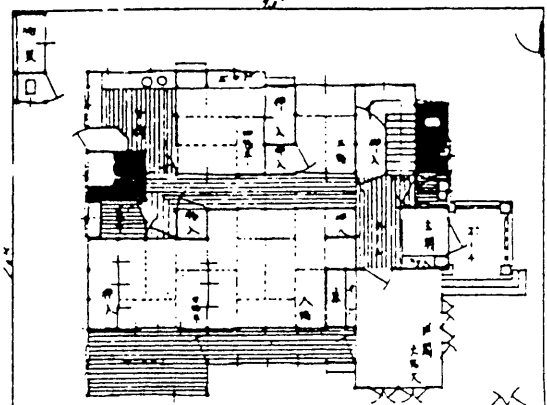
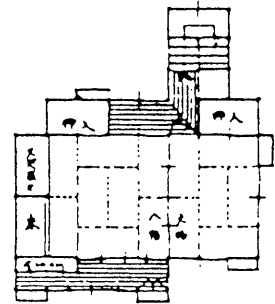
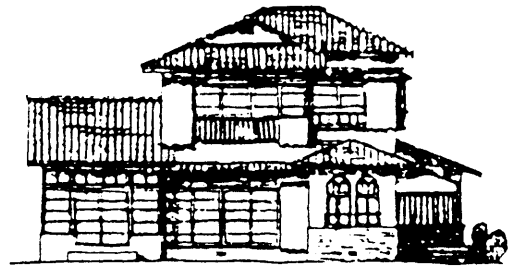


図3-3 阪急新伊丹住宅地分譲住宅の1例（昭和10年ころ）

第4章 住吉・御影山手住宅地

4-1 概観

阪神間住宅地の中で高級住宅地として一般的に知られているのは芦屋であるが、実際は更にその上をいく高級住宅地として住吉・御影山手の住宅地がある。これは現在のJ.R.東海道線以北から山麓に連なる一帯である。この住宅地の発展は区画整理事業や土地会社の宅地分譲方式によるものではなく、個々の地主や住吉村村有地の売買、賃貸などの土地取引によって進行したものであった。この地域では第2次世界大戦までは余所で行われたような大規模な区画整理事業や民間土地会社の大規模な土地経営は行われなかった。但し、阪神国道線以南の住吉村では住吉村耕地整理組合がつけられ、大正8年から12年にかけて、耕地整理事業が行われた。

したがって、住吉村山田区、観音区、空区、西区など東海道本線北側地区は昔の田圃道がそのまま市街地化することとなる。住吉村が郊外住宅地として脚光を浴びるようになるのは明治7年の鉄道開通が大きな起因であるが、それが具体的に表れるのは明治30年代に入ってからであった。

住吉村の郊外住宅地発展の契機について、明治38年ころ、後に阪神間の住宅地開発に尽くした阿部元太郎が、住吉川上流の観音林や反高林が住宅地として将来性のあることに着目して、坪七厘で借り受けて経営に着手したと言われている⁸⁷⁾。しかしこの時より少し早く、この地は大阪の有力事業家たちの注目を集めていた。

この地域で最も大きな宅地を保有しているのは村山邸であり、現在でも緑豊かな樹林に囲まれている。この屋敷は朝日新聞社の創業者であった村山竜平の私邸として知られているが、村山家がこの土地、御影町郡家を手に入れたのは明治33年ころであり、同35年には茶会が催されていることから、このころ既に茶室か居宅を構えていたと考えられる⁸⁸⁾。ただ本格的な建物としては明治42年に洋館が完成している。

また、住友家の重鎮であった田辺貞吉は明治37年7月、住友家を退いてその退職金で住吉村反高林に地所を買ったと言われる。その敷地は約5,000坪であり、住友家の本店臨時建築部技師長だった野口孫市の設計になる邸宅を建て、これに住まった。そのうちの洋館部分(明治41年建築)は現在も残るが、この地所は後に住友本家に譲られた(写真4-1)。

その後大正14年に住友吉左衛門は大阪天王寺茶臼山の敷地を大阪市に寄付してこの地に移った。この時茶臼山の本邸の一部は住吉の住まいに生かされたと言われ⁸⁹⁾、住吉の本邸も大名屋敷に通ずる書院造風の宏大な邸宅であった。

なお、住友家にちなんでは、明治37年から大正11年まで総理事を務めた鈴木馬左也の邸宅も御影町郡家に建て

られた。この邸宅を建てるに当たって、鈴木馬左也は明治38年この土地を購入している。彼は同42年約2,000坪に及ぶ敷地を生かし、明治42年に御殿風の格調ある邸宅を建てている⁹⁰⁾(図4-1)。

更に岩井産業を興した岩井勝次郎は御影町郡家兼安の土地を明治38年に取得し、大正5年宏大な大邸宅を洋風



写真4-1 旧 田辺貞吉邸(明治41年)野口孫市設計
(今回の震災で損傷1995.3.31.追記)

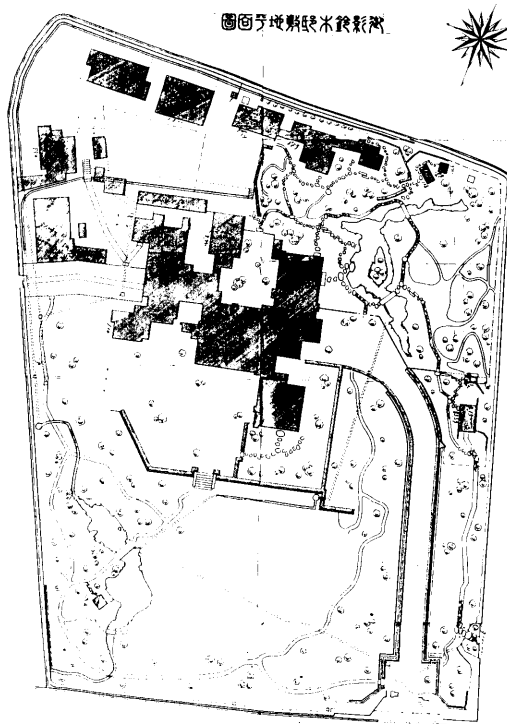


図4-1 鈴木馬左也邸配置図(明治42年)
設計者不祥(橋本素子氏蔵)

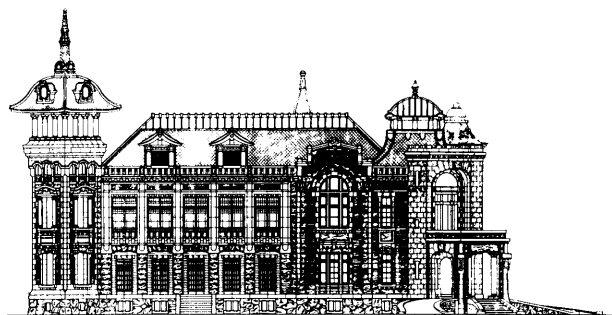


図4-2 岩井勝次郎邸(大正5年)河合浩蔵設計

で建てる。設計は河合浩蔵であった(図4-2)。このように住吉・御影の山手の地所は、明治30年代に軌を一にして大阪の豪商たちがこの地の土地を買い占めることとなった。しかし彼らの土地購入はの場合営業用ではなく、自らの居住用であったことは、この土地の将来の住環境を方向付ける上で役立つものであった。すなわち、いわゆる乱開発が避けられたと見られるからである。

一般的に言えば阪神間が良好な住宅地として発展した要因としてはまず地の利があるが、その地の利が主として大阪からの資産家、知識階級の家族の居住を増したことがあげられる。しかしその中でも特に住吉・御影地区は資産家、中でも大企業のオーナー社長クラスの富豪が多く住まった。

戦前は特に昭和初期に日本の貿易輸出額の6割を占めるに至った企業は、繊維・紡績など糸へん関係であるが²¹¹⁾、その主要会社の社長クラスの多くが住吉・御影に居住するようになった。具体的には当時の綿紡界を代表する大日本紡績の取締役田代重右衛門の本邸(雨ノ神、明治42年)、東洋紡績社長阿部房次郎の本邸(反高林、大正6年)、鐘淵紡績社長武藤山治の本邸(観音林、大正7年ころ)があり、これに伴って日紡系、東洋紡系、鐘紡系の各重役の私邸がこの地に集まっていた。

住友系も同様であって、住友本家のほか分家忠輝邸、住友義輝邸を始めとして、先に述べた総理事鈴木馬左也邸、本店支配人国府精一郎、本社理事三村起一郎、住友銀行会長八代則彦邸、本社理事で詩人でもあった川田順邸、住友生命理事の橋本重幸邸、住友銀行理事大島堅造邸など枚挙にいとまがない。住友お抱えの建築家だった野口孫市の私邸もこの地にあった(写真4-2)。

このほか日本生命社長弘世助太郎邸、その一族大阪農工銀行頭取弘世正二郎、弘世巖邸、今日の野村証券を築いた野村徳七の私邸、その弟で野村銀行頭取野村元五郎邸、大阪毛織・芝川商店社長芝川栄助邸、大阪の資産家岡橋芳太郎邸、同じく大阪株式取引所一般取引員静藤次郎邸があり、貿易関係では安宅産業の安宅弥吉、伊藤忠商事の伊藤忠兵衛、丸紅商店の伊藤長兵衛らの邸宅が岩井勝次郎邸と共にあった。海運関係でも広海汽船の広海二三男、千浦友七郎(日本海上工業)、製薬関係で武田長兵衛邸など、いずれも規模が大きく本格的な建築が少なくない。

このような大阪経済界の有力者たちがこの地に住まうに当たって社交クラブ建設の必要性が言われ、明治45年阿部元太郎、田辺貞吉、野村元五郎、芝川栄助、静藤次郎らが発起人となり、「観音林倶楽部」が設立され、建物を野口孫市が設計している。会員は多い時で90名を数え、安宅弥吉、久原房之助、平生釧三郎、佐々木八十八ら5人の勅選議員が含まれ、事業として座談会、講演会のほか、囲碁、謡曲、ビリヤード、生け花等の娯楽の集まりや講習が行われた。これらの活動は地域のコミュニティ

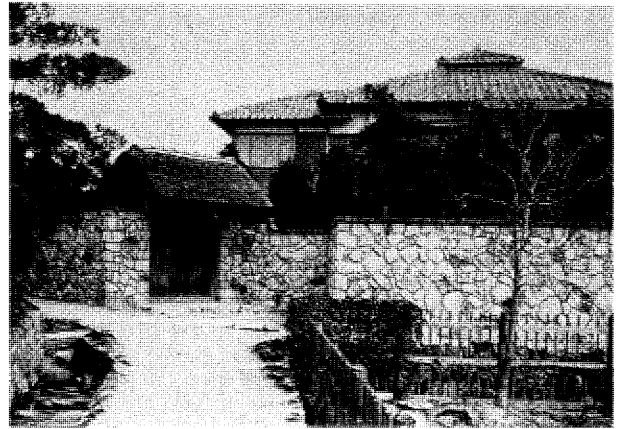


写真4-2 野口孫市自邸(明治43年)野口孫市設計
(浜田信義氏蔵)

の形成に少なからず役立っていたと言えよう²¹²⁾。

更にこの地域の発展に大きく貢献したのは、明治44年の甲南幼稚園の開園、翌45年の甲南小学校の誕生であった。この動きは明治43年の春、住吉村に住む関西の実業家の間で、当時の画一的な幼児教育ではなく、個性や自由を重んじる少人数の小学校の開設が計画された。その中心人物弘世助太郎、平生釧三郎(のち川崎造船所社長、文部大臣)、才賀藤吉(電気事業家、衆議院議員)、中島保之介(鉄材貿易商)らがいた。そして反高林の村有地を借り受けて幼稚園を開設したのである。この教育機関は、大正11年7年制の甲南高等学校の開校に結びつき、甲南高等女学校と共にこの地域の同窓生による人的連帯感を深め、地域の文化的土壌を形成する上で役立っていた²¹³⁾。

4-2 洋風住宅の系譜

このような経緯の中でこの地域に住まいを求めた富裕階層たちの住居について考察すると、大きく二つの系譜に分けて見ることができる。一つは洋風要素の多い住宅であり、他の一つは和風要素の多い住宅である。そしてこの二つを両極としてその中間に和洋の折衷があるわけで、その構図は必ずしもこの地域のみの特性とは言いがたいが、特にこの地域ではその規模が大きく、質も極めて高く、かつ量も豊富で、これほどの密度を有した高級な住宅地は他に類例を見ないほどであったと言える。

住吉・御影地域に建てられた洋風住宅の早い例は、先に述べた住友理事だった田辺貞吉の西洋館(住吉村字反高林、明治41年)であり、これはハーフティンバースタイルをもつ格調の高い洋館で、日本館部分は失われている。次に古い例として村山竜平邸(明治42年)がある。この建物もハーフティンバーを用いた洋館で建築家河合幾次の設計である。また、この頃住吉川を挟んで東側にある久原房之助邸でも和風の大邸宅と並んで本格的な西洋館が建てられた。久原邸は住吉町に隣接する本山村に属するが、日常の生活文化圏としては全く同一の環境であった。久原邸は1万坪を超える^{こうだい}宏大な敷地に^{がんこう}雁行する

書院造風の日本館と丸太造りのロシア館などを建てていた。また久原房之助は甲南学園の振興のため多くの財政援助を行った。

久原邸の北方の丘上に建ったヘルマン邸は、ドイツ人建築家G.デ.ラランデの設計で明治40年に完成したセセッションスタイルの西洋館であった。

大正時代に入って第一次世界大戦の勃発は、計らずも大阪、神戸に大きな繁栄をもたらすが、その効果はこの地域にも表れた。千浦友七郎邸(大正3年ころ)は宗兵蔵の設計になる格調の高い住宅であった。この建物は現存しないが、現存する旧松岡道治邸(現小川邸、大正10年)はやはり宗兵蔵の設計になる完成度の高い建物である。

また岩井商店主岩井勝次郎邸(大正5年)は日本趣味を加えた独特の様式を見せ石造風の大規模な建築であった。しかしこのような大規模な洋風建築でありながら、2階の室内は和風の構成であった。

次いで大規模な洋風住宅として野村証券の野村徳七郎(大正12年)がある。この邸宅はRC造で3階建て赤煉瓦造り風に仕上げ、建築面積は192坪延495坪に及ぶ大建築で塔屋をもち、一際目立つ建築で竹中工務店の設計であった。大正時代の洋風建築はこの地域ではこのようなスケールの住宅が存在していた。

このほか大正末期から昭和初期にかけて高い水準の住宅が少なからず建てられている。例えば先の甲南学園の理事長を務めた平生釭三郎邸(大正末期、石本喜久治設計)(写真4-3)、旧小倉拾次郎邸(大正14年、笹川慎一)、木水邸(大正15年、小川安一郎)(写真4-4)などがあり、大正9年に開通した阪急電鉄の御影駅の開設は一層御影・住吉の山手地区の発展に貢献した。この阪

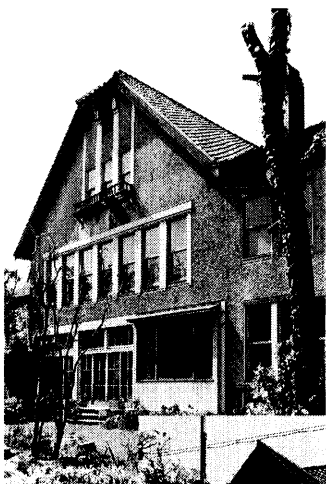


写真4-3
平生釭三郎邸
(大正13年、現存せず)
石本喜久治設計



写真4-4 木水邸
(大正15年)
小川安一郎設計

急山側の地域は一部戦災に遭うが区画整理区域の対象とならず、昭和戦前期の雰囲気良く残している。

昭和初期の大型洋風住宅も少なくない。そのうち大きな規模をもつ住宅に大林邸(昭和7年)がある。阪急御影駅の山手の緑深い南斜面の宏大な土地にスパニッシュスタイルの白亜の西洋館が和館部と共に建っている。

スパニッシュの系列は大正後半から昭和前期にかけて流行するが、このスタイルの秀作として小寺敬三邸(昭和4年)、広海二三郎邸(昭和14年、現存せず)はいずれもヴォーリズの設計になる。このほかイギリスのチューダースタイルを採り入れた武田長兵衛邸(昭和7年、松室重光)、ネオルネッサンス調の乾邸(昭和12年、渡辺節)、モダニズムの野村元五郎邸(昭和10年、安井武雄、現存せず)、住友義輝邸(昭和7年、住友工作部、現存せず)、などが建てられた。これらはいわゆる洋風系列に乗る代表的な住宅である。

4-3 和風住宅の系譜

和風住宅の系譜を見ると洋風をしのぐ規模や質、量でこの地の良好な住宅地景観をつくり出した。

現在までに判明している和風住宅の実情を時代ごとに考察すると下記のようになる。

明治時代	所在地
久原房之助邸(明治37年)	本山村野寄
田代重右衛門邸(明治42年)	住吉村
鈴木馬左也邸(明治42年)	御影町(図4-1)
阿部元太郎邸(明治42年ころ)	住吉村
野口孫市邸(明治43年)	住吉村(写真4-2)
才賀藤吉邸(明治43年ころ)	住吉村(図4-3)
大正時代	
真野愛三郎邸(大正2・3年ころ)	住吉村

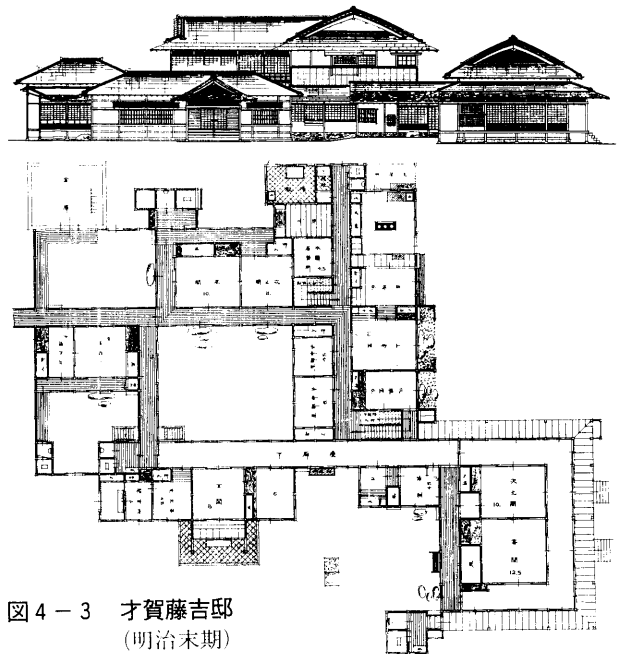


図4-3 才賀藤吉邸
(明治末期)

平田讓衛邸（大正5年）	住吉村
阿部房次郎邸（大正6年）	住吉村
武藤山治邸（大正5～6年）	住吉村
住友吉左衛門邸（大正14年）	住吉村
中島保之介邸（大正15年）	住吉村
安宅弥吉邸（大正14年ころ）	住吉村
喜納治兵衛邸（大正中ころ）	住吉村
弘世助三郎邸（大正中ころ）	住吉村
岡橋芳太郎邸（大正末ころ）	住吉村
堀田邸（大正初期？）	住吉村

昭和戦前期

大谷光暢邸（昭和5・6年） 住吉村

などがある。いずれも関西の財界、産業界に重きをなした人物の私邸であり、それぞれ広い庭には茶室を有し、日本式庭園もあって、緑の豊かな住環境が形成されていた。これらの住宅についてはこれからも調査を進めたいと思っている。

関西を代表する経済・産業界の主要な人物が私邸に和風住宅を好んだ理由については、当時の関西財界人の気性を理解する必要がある。

住友家の総理事であった鈴木馬左也の邸宅は純和風の建築で広い庭園をもち日本式庭園には茶室があり、その構えは大名屋敷に通じる風格をもっていた。馬左也はまた茶道の素養があって小堀遠州流をたしなみ禅学を志す姿勢の持ち主であった。

住友本邸にしても大阪の茶臼山時代はもとより、住吉に移ってもその構えは書院造であり、御殿としての格式を有していた。

大日本紡績の創業者のひとり田代重右衛門もいち早く住まいを住吉村雨ノ神に求めるが、彼の住まいも2階建ての和風住宅であった。重右衛門は敬虔な仏教徒で特に真宗大谷派本願寺への信仰は深く、広い自邸の一部に道場を建てて、布教への協力をいとわなかった²¹⁾。

和風を好んだ関西人オーナーたちの意向を代弁するかのように住友の建築家だった野口孫市の自邸も和風であった。野口は大阪府立図書館、住友須磨別邸など本格的な洋風建築をこなすベテランであったが、自邸は和風で建てた。彼の自邸は門を茅葺きで造り2階建ての屋根は換気を兼ねた二重の棟をもち和風ながら書斎には暖炉が用意された。野口邸は和風と言っても純粋な伝統様式の墨守ではなく創意を加味した和風であった。更に外部の塀は地元で採れる御影石を用い、この住宅地の景観の特色ともなっている玉石積みの工法でつくられていた。

このように住吉・御影の山手地区は六甲山の緑を背景に洋風・和風の大邸宅が建ち並び、明るい御影色の石垣と手入れの行き届いた生け垣とが織りなす優れた住宅地の景観を形成するに至っている。

結 語

阪神間の郊外住宅地形成はその発生以来およそ1世紀近い年数を経過し、それぞれの住宅地は多様な表情を見せて我々の目の前にある。

そこに郊外住宅地として成功している例と、その性格が大きく変貌を遂げている地域も認められる。しかしこの半世紀以上の郊外住宅地の形成は、我が国の住宅近代史のうえで重要な舞台となっていたことをうかがうことができる。また、この地域の住宅地経営が多様な展開を見せる中、良好な住宅地として発展する上での要因を読み取ることができよう。大切なことは最初の段階でその住宅地の構想、理想をどのように組み立てていたかが、いかに重要であるかを感じ取ることができる。また、折角の良好な住宅地が心ない開発優先の主張の前に環境を著しく悪化させたり、優れた住宅建築を破壊に追い詰めた例を数多く見ることができる。

今回の調査に当たって幾つかの興味深い新しい知見を得た。優れた住宅地を判断するのに当たって決して現状のみをもって判断するのではなく、その住宅地の形成過程を十分理解する必要があることに気付く。すなわち、その住宅地の歴史、宅地の形状を読み取ることがいかに大切であるかということである。また区画整理方式でつくられた宅地計画が必ずしも最も適当な方法ではないことも明らかである。この度の調査を契機として今後もこの地域の住宅地形成への歩み、また近代住宅の形成過程について考究していきたいと考えている。

<参考文献>

- 1) 日本地理風俗大系 近畿地方 1938
- 2) 西山卯三 日本のすまい(II) 1986.7.31.p.107
- 3) 和田康由, 寺内信 郊外住宅地開発の史的考察その2, 住宅地開発に関わった人たち+下村喜三郎の場合+ : 日本建築学会大会学術講演梗概集 1988.10.
- 4) 新建築 大林組住宅部作品号 1930.1.1.
- 5) 大林組百年史 大林組社史編集委員会 1993.6.p.67
- 6) 坂本勝比古 日本の建築 明治, 大正, 昭和5, 商都のデザイン 1980.9.
- 7) 住吉村誌 住吉学園 1946.12.10.
- 8) 村山竜平伝 社史編集室 朝日新聞社 1953.11.24.
- 9) 住友春翠「住友春翠」編纂委員会 1955.3.2.
- 10) 鈴木馬左也 鈴木馬左也翁伝記編纂会 1961.12.20.
- 11) 日本紡績年鑑 日本紡績通信社 1928.11.3.
- 12) 住吉村誌 注7)
- 13) 甲南学園の七十年 甲南学園史資料室委員会 甲南学園 1992.4.21.
- 14) 田代重右衛門翁 北野種次郎 1934.12.2.

<研究組織>

主査 坂本勝比古 神戸芸術工科大学教授
委員 鈴木 成文 神戸芸術工科大学教授
〃 日色 真帆 神戸芸術工科大学助手

追記

阪神・淡路大震災による調査地の被災状況

坂本 勝比古

— 芦屋川流域中央部の昭和戦前期住宅を中心に —

1995年1月17日の早朝5時46分、突如発生した阪神・淡路大震災は、営々と築き上げてきた、阪神間の良好な住宅環境を一変させる激震となって現れた。まさに、阪神間の優れた住宅地が、直下型地震の直撃を受けたのである。その結果、明治・大正・昭和期にまたがる、わが国の近代住宅の重要な発展過程を考察できる地域が、潰滅的な損害を受けた。

この2～3年間にわたって「住宅総合研究財団」の助成を受けて行ってきた、阪神間の住宅地並びに都市住宅群の多くは、大小の被害を被り、姿を消したのも少なくない。

私共の調査は、住宅地形成にかかわる総論的な視点が先行したため、個々の住宅に言及するところまで進展していないくらいはあったが、それでもある程度まで、地域の特徴や、そこに散在した主な住宅の幾つかを取り上げることは可能であった。したがって、それらの住宅が、今回の震災によって、どのような被害を受けたのかを調査することも重要な視点となっている。

震災直後から、この問題について関心を持ち、幾つかの住宅地を見て回ったが、交通機関が寸断されていたため、まだ予定地のすべてを見て回る余裕がないのが実情である（1995年3月現在）。

ただ、現在までに見聞した範囲では、相当深刻な被害を受けていることだけは間違いない。特に、阪神間の住吉・御影地区、芦屋川の川西・月若・業平・松ノ内・船戸地区、夙川の雲井・殿山地区、南郷山・名次地区、西宮の甲風園・甲東園・甲子園口では、昭和以前の優れた和風住宅が致命的な打撃を受けて、その多くが消滅した。関西の郊外住宅地に目立つのは、重量感のある本瓦葺き入母屋屋根、杉皮張りの外壁、南側に広く開いた縁側を持つ2階建の住宅であった。これらの住宅は、カイズカの生垣に囲まれ、しょうしゃな腕木門を持つ数寄屋がかった和風住宅が多かった。

このような住宅が今回著しい損傷を受けたのである。全壊したもの、半壊したものは数知れない。ここで在来工法・伝統工法の良し悪しが問題になっている。更に、戦後の木造住宅も倒壊が多いため、木質系のプレハブ住宅との優劣が話題となっている。実際、隣り合わせの敷地で、昭和初期の和風住宅が倒壊し、プレハブ住宅（鉄

骨系）が損傷なく建っている例が見られた。プレハブ住宅は、その構造上、壁量が多く、結果的に耐震性が高まることとなり、軽量性と相まって、プレハブ住宅有利の情報が流れた。在来工法の問題点を指摘する声も多い。実際に、在来工法とプレハブ住宅との優劣については、簡単に結論を出すことは時期尚早であると考ええる。もっと多くのデータを集め、分析しなければ、容易に解決できないであろう。今回の震災に伴う、木造住宅の被害は深刻であり、多数の犠牲者を生んでいることから、その要因は十分検討されなければならない。

在来工法の欠点の一つは、老朽化の問題と同時に、施工不良の問題がある。特に、後者の問題は、人為的要素がからむため、その対策は重要である。前者の問題も、日常のメンテナンスの問題とも連動して考えなければならない。更に、根本的には、これは単に一般住宅に限らないが、地盤の問題が、地上の建物に大きく影響したのではないかという点である。神戸では、山麓地域の被害が、相対的に軽い傾向があった。これは地盤の強弱が大きく影響したものと考えられる。したがって、住宅においても、その建築敷地の地盤に関する情報は重要であると言えよう。六甲山麓から海岸にかけて带状に連坦した被害地域は、沖積層によることが地震学者らによって指摘されている。この地域は平坦で、交通機関・商業施設などが多く、住宅密集地域であった。それゆえ、住宅倒壊の原因調査に当たっては、地上構築物の構造・工法・築年数・構造種別・材料などのほか、地質についての調査が、判定の重要な基準になるものと考えられる。

今回の震災で明確になったことは、昭和戦前期の和風住宅は、震度6～7程度の地震に遭うと、地域によっては90%近い確率で倒壊すると予測できることである。これは、実際に発生した芦屋市・西宮市の一部地域を調査・見聞した結果で、以前、筆者が調査した戦前和風住宅の大半が倒壊していたことによる。したがって、他の地域、あるいは倒壊を免れた住宅については、その補強方法について、対策が取られる必要があるだろう。詳細な調査は今後にゆだねるとして、今早急に、対応すると共に、今後の取組みについての議論が求められている。

阪神間の中核的な住宅都市・芦屋市の中心部における昭和戦前の住宅の被災状況について、被災前の写真があって、その後の状況との比較ができるよう、その一部の地域についての事例を紹介することとする。

ここで取り上げた住宅は、以前、筆者が注目して写真を撮っていた建物で、今回の震災によって倒壊した住宅は、その最後の遺影となった。いずれも芦屋という関西でも有数な住宅地の中で、特に、良好な住環境にあった地域である。この辺りは、芦屋の区画整理事業が大正から昭和初期にかけて進行した中で建てられたものであり、昭和13年の大水害・昭和20年の空襲にも、被災を免れてきた都市郊外住宅であった。

芦屋のこのような住宅地は、住吉・御影などの大邸宅とは異なるが、戦前の中流住宅の中でも上位に位置するものである（戦後から近年までの評価では高級住宅地と

見なされている）。戦前のこの辺りの住宅地は、中流と言っても、大阪にある会社の重役、又は、社長クラスの社会的地位にあった人々の住宅であった。その時代の会社の重役は、いわゆるサラリーマン重役と違って、オーナークラスの重役であったから、収入や資産力は戦後のそれとは格段の差があったと言える。また、知的水準においても、いわゆるインテリ階級であった。したがって、大阪・神戸の富裕な階層が、腕前の良い大工棟梁、あるいは建築家の協力を得てつくり上げた住宅群と言える。それだけに、これらの住宅は、和風の場合は書院造、又は、数寄屋風の住宅で、品位のある関西人の和風好みの典型的な作例が多く見られた。加えて、これらの住宅は、生垣・築地塀・腕木門・石垣・白亜の蔵・年輪を重ねた樹木などに囲まれて、優れた住宅地景観を形成していた。その景観の多くが、今回の震災によって失われたことは、惜しみても余りあるものがある。

(1995年3月31日記)

表 追-1
芦屋川流域中央部の昭和戦前期住宅（一部地域のみ）
被災状況

No	住宅名	町名	様式・規模	建築年 (推定)	結果
1	S邸	川西町	和風・2階建	大正末 昭和初期	倒壊
2	T邸	公光町	〃	〃	〃
3	Y邸	業平町	〃	〃	〃
4	O邸	〃	〃	〃	〃
5	H邸	前田町	〃	〃	〃
6	H邸	〃	洋風・2階建	〃	〃
7	S邸	月若町	和風・2階建	〃	〃
8	K邸	松ノ内町	〃	〃	現存
9	O邸	〃	〃	〃	〃
10	U邸	〃	〃	〃	〃
11	T邸	〃	洋風・2階建 和風平屋建	〃	倒壊
12	S邸	船戸町	和風・2階建	昭和初期	〃
13	F邸	〃	〃	〃	〃
14	Y邸	〃	〃	大正末	〃
15	I邸	〃	〃	〃	現存
16	T邸	〃	洋風・2階建	昭和初期	〃
17	H邸	〃	〃	〃	倒壊

注：No.8及びNo.17の写真は欠く。
又、芦屋川下流域は対象に含めていない。

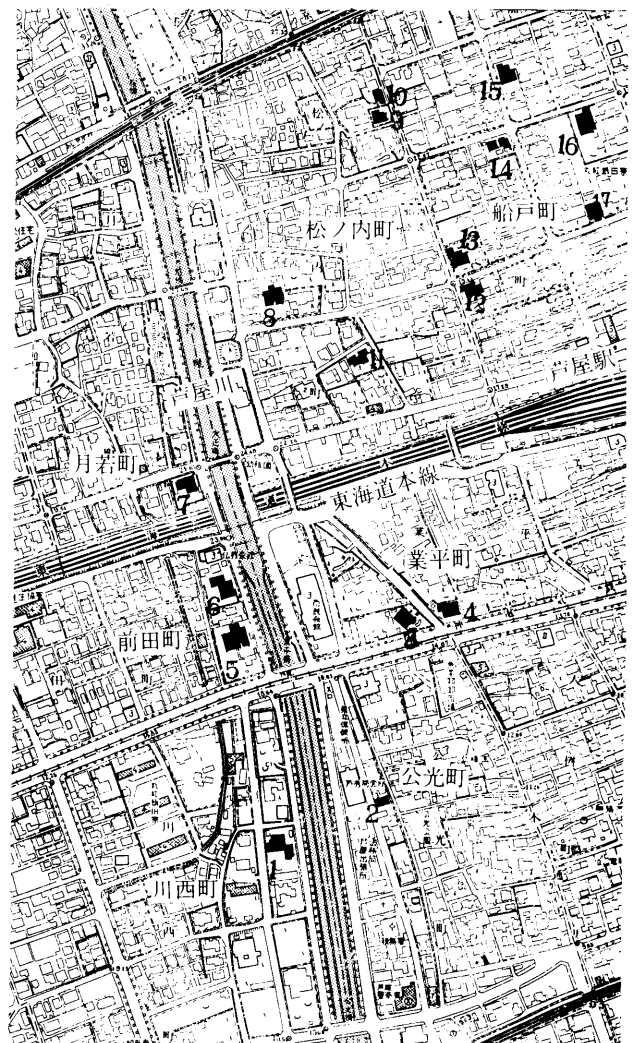


図 追-1
芦屋川流域中央部地図

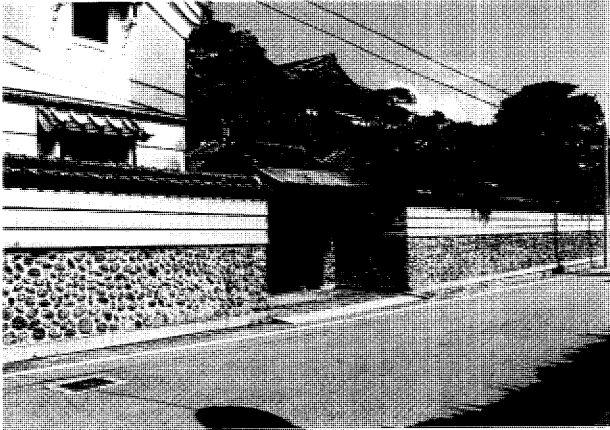


写真 追1-1 No.1 S邸 (芦屋市川西町)
 芦屋川沿いに建つこの住宅は美しい築地塀・白い土蔵・入母屋造の主屋・杉皮張りの外壁など、芦屋を代表する邸宅の一つであった。



写真 追1-2
 S邸
 主屋・玄関回り。

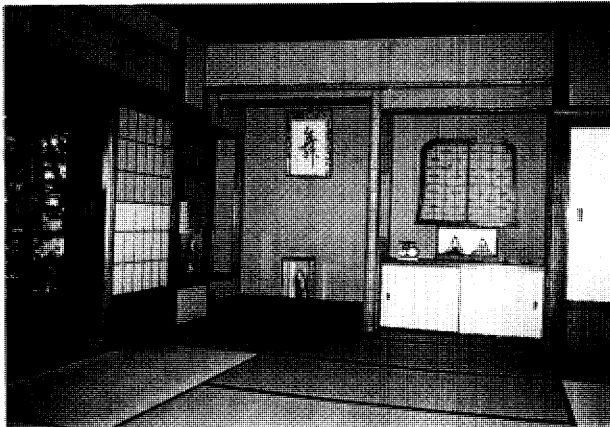


写真 追1-3
 S邸 主屋・2階竹の間。



写真 追1-4
 S邸 離れ・1階暖炉回り。
 小川安一郎の設計



写真 追2
 No.2 T邸 (芦屋市公光町)
 芦屋川の東岸にあった住宅。
 小品ながら趣を持つ。

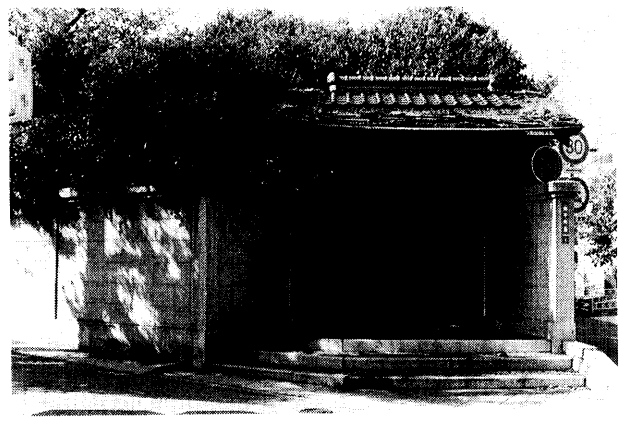


写真 追3
 No.3 Y邸 (芦屋市業平町)
 国道2号線沿いの邸宅の正門。
 桧皮葺きであった。

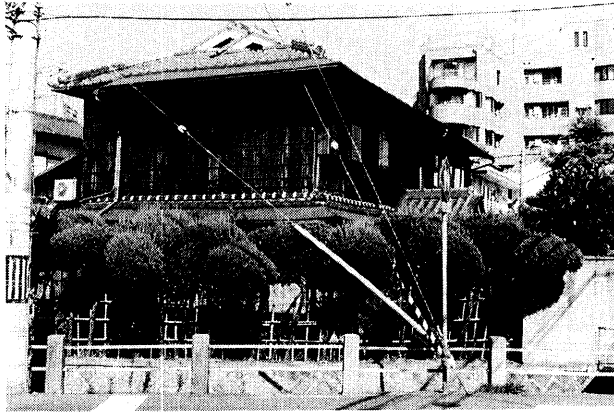


写真 追4

No.4 O邸 (芦屋市業平町)

国道2号線沿いの住宅。
外壁は杉皮張りであった。



写真 追5

No.5 旧K邸 (芦屋市前田町)
芦屋川沿いの大邸宅のひとつ。
高い板塀・松林に囲まれていた。



写真 追6

No.6 旧Y邸 (芦屋市前田町)

芦屋川沿いの西洋館のひとつ。
十数年前に一部改造されていた。
小川安一郎の設計。

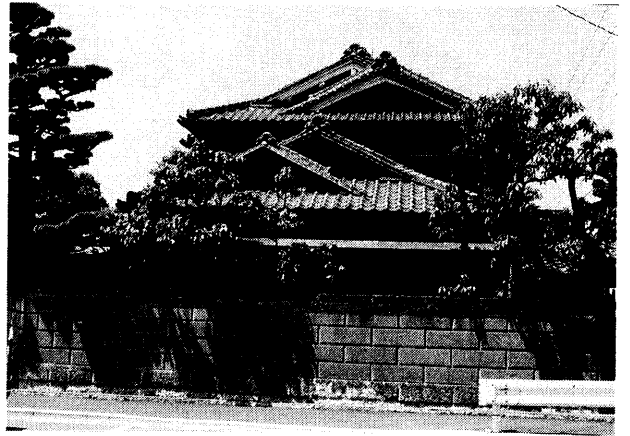


写真 追7

No.7 S邸 (芦屋市月若町)

大正橋の橋詰めにあった。
重層の入母屋屋根が目立つ建物であった。



写真 追8

No.9 O邸 (芦屋市松ノ内町)

典型的な和風2階建住宅のひとつ。
この住宅は倒壊を免れた。

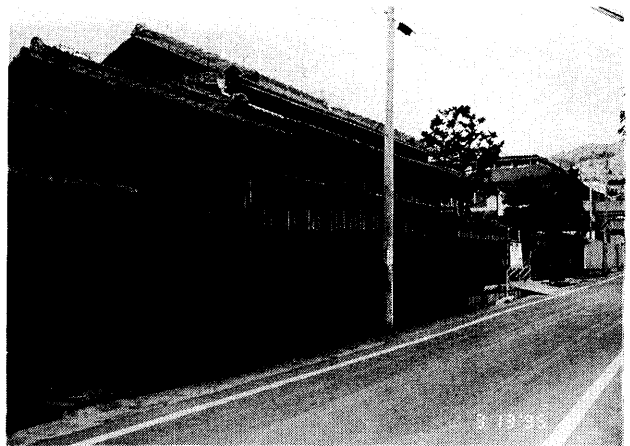


写真 追9

No.10 U邸 (芦屋市松ノ内町)

和風平屋建住宅。
倒壊を免れた。

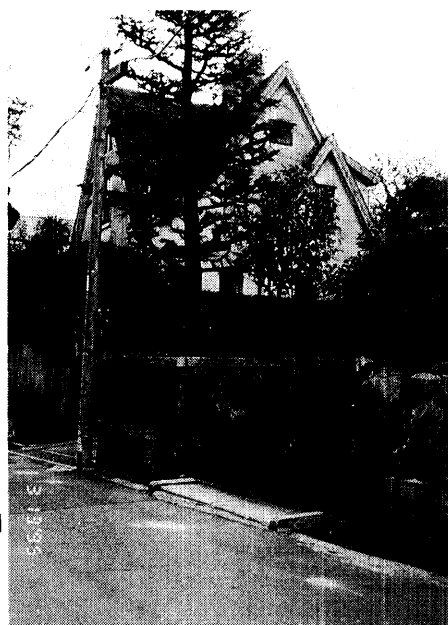


写真 追10
No.11 T邸

(芦屋市松ノ内町)
西洋館の煙突が倒れ、家屋が損壊し撤去された。



写真 追11
No.12 S邸 (芦屋市船戸町)
白壁の上蔵を持つ和風住宅。



写真 追12
No.13 F邸 (芦屋市船戸町)
大規模で重厚な和風住宅であった。



写真 追13
No.14 Y邸 (芦屋市船戸町)
軽快な和風屋根を持つ、
格調の高い住宅であった。



写真 追14
No.15 I邸 (芦屋市船戸町)
大正末期の和風住宅、
左側にステンドグラスの欄間のある応接間が付く。
この住宅は倒壊を免れた。

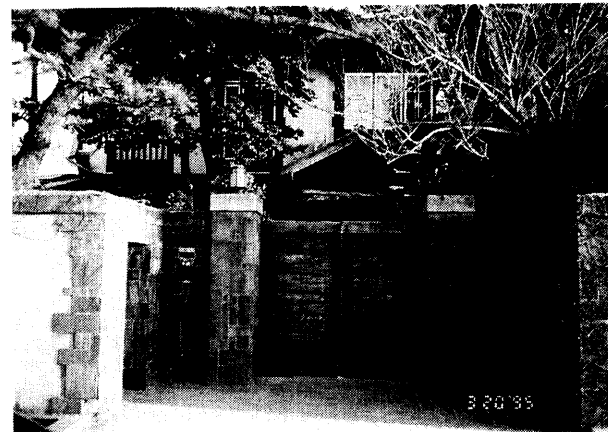


写真 追15
No.16 T邸 (芦屋市船戸町)
西洋館のひとつ。
倒壊を免れた。